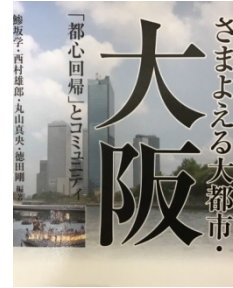


さまよえる大都市・大阪

写真は長年にわたる社会学研究者による共同研究の成果である。「都心回帰」とコミュニティという副題のように、大都市・大阪をマクロとミクロから調査研究している。紹介したいことは多いが、まず終章「大阪の求心性はいかに回復されるか」(岩崎信彦)の一部から。「世界都市」という概念から、大阪のあり方を論じている。



世界都市には二つの異なった意味がある。一つはワールドシティ world city であり、L. マンフォードは「世界都市の文化的機能」という節で次のようにいっている。「われわれは最悪の事態(都市への核爆弾の投下)に直面して、歴史的メトロポリスの機能を、国民経済あるいは帝国経済の焦点としてではなしに、それよりずっと重要な、世界的中心という潜在的役割をもつものとして理解する地点について到達した。」(『歴史の都市 明日の都市』) 被爆都市である広島や長崎は、その悲惨な経験を踏まえて No More Hiroshima, Nagasaki として世界に「核廃絶」を訴えているが、まさに world city を体現しているのである。

もう一つはグローバルシティ global city である。世界的に資本活動を行なう多国籍企業群が所在する都市、「帝国経済の焦点」である。そのような位置づけをすれば、広島や長崎は原爆被害の悲惨と核廃絶の祈りを世界に発信する world city であるが、global city ではない。逆に東京は global city であるが、世界に発信する精神文化性を必ずしも有していないとすれば world city ではない。

大阪が「第二の都市」として「なりたがり世界都市」であるという場合は global city の意味であるが、本来なりたがるべきは world city である。それではどうすれば world city になれるのか。広島や長崎の場合がそれを教えてくれる。その都市の住民がみずからの深い体験を反省的にとらえその地で生きていく何らかのアイデアをもって生活していくことである。広島や長崎では「核廃絶」というアイデアが市民に共有されているのであり、その形象化されたものが原爆ドームであり平和祈念像であるのである。

都市大阪の求心性は「うめきた」の開発事業だけによってもたらされるものではない。また、カジノや万博の誘致によって実現されるものでもない。それらにどのような精神性が盛り込まれているかにかかっている。

このような大都市の求心性を支えるのは、「都心周縁」の町々の市民の生活文化とアイデアである。そうした町々は都心の「磁力」を支えそれに活力を与える「容器」なのである。そして、都市大阪の町々は魅力に富んでいる。「都市の将来の活動的役割は、かずかずの地方、文化、人間個性などに見られる多様性と独自性を最高度に発展させることである」(マンフォード)にほかならない。

(2019年7月17日)